
Catch the eye 2017年7月

2017/7/7
(金) 軸をすえてくれ
た本

台風に刺激されたのか、九州・山陰でおそろしいほどの雨。大阪は昨日に続き晴れ。朝はまだ曇りだったけど、事務所へ着く手前、この夏一番、蝉の声。ほんのひと声、しばり出していた。今日は小暑。

『先生はどうか、育てたという感じですか?』。自分ならではの業で未来を拓こうとする女性にハッパをかけてきて、それが糧になったと言ってもらった彼女たちの一人に尋ねられた一言。

『それは全くない、そういう考えはまったくありません』と即答。育てたなんて考えたこともないけど、「パーソナル・アシスタント」を実践できる、その機会を得られてさいわいとは感じている。

ここ最近自分で自分のことを”筋金入りだ…”感じるようになった。それほどだけど、もしあの本に出合わなかったら、とうに「パーソナル・アシスタント」を投げ出していたかもしれない、22年も前に。

自分のやろうとしていることはひょっとするとピンがずれているのではないか。われを疑うほどに、まわりの人たちにピンときてもらえなかった。本当にずれているのかどうか、それを確かめるのにアテにしたのが本。

『ニューウェーブマネジメント』（金井壽広 創元社）。箕面の図書館、午後の時間をまるまる使って探し求め、帰り際に目にとびこんだ本。読み進めるうちに包まれる高揚感。

“同じようなことを考えている人がいる、ずれていない…”。全体を通したこの印象が軸をすえてくれた、内容そのものというよりも。もう一つ、理解し合える人が近くにいるとは限らない、ということも。

この本との出会いには続きの物語りがある。それはまた別の機会に。

2017/7/13
(木) 今朝の光景

外に出るのがイヤになるほど暑い。今日は35度まであがるとか。まだ梅雨明けしていないが、蝉の声は本鳴き。祇園祭の山鉾巡行もすぐ。夏だ、夏。

何か落ちている。今朝の地下鉄車内。ドアの側にたつ女性二人。その一つ後ろの反対ドアから何気なく目を二人に移した時に気づいた。ハンカチか何か、淡いピンクのものだった。

二人は気づかないのかな? すぐ足もとだから降りる時には気づくと思うけど…。そのうち一人が足もとを見た。よかった…と思おうとしたら、彼女は知らん顔で目を上げた。

うん? 二人のものじゃないのかな…。誰か前に降りた人が落としたものなのかと思っていたら、座席から一人の中年女性が二人の足もとにかけ寄り、拾い上げて、知らん顔していた女性に渡してあげた。

ところが受け取った彼女は特にありがたそうではなかった。遠目にみていると、少しヘンに感じた。彼女はそれをもう一人の女性にわたした。その人の反応も鈍かった。しばらくして、お礼を言ったのだった。

お礼を言った女性は杖をもっていた。視覚障がいのある人だった。すると側にいるのは介助者？ それにしても、気がきかない。同じ中津駅で降り、前に行く二人の様子を見る。

二人はエスカレーターではなく階段を使った。自動改札のところではすぐ前になった。すると、あの彼女は声もかけず自分が先に通ろうとした。見えない女性の方はぶつかり、「あっ、ごめん」と謝った。

それに対しても無言。たぶん専門の介助者ではなく、会社の同僚か友人。それでももう少し気遣うもの。ひよっとすると知ってやっているのかと疑った。最近は陰湿なイジメがあるというから。

もしそういうことがあったら絶対許さない。見てみぬフリはしない。自分の損得に関係ない。必ず真偽を正す。受け流していいことと、けっしてそうしてはいけないことがある。そんなことを思った今朝の光景だった。

2017/7/18 たいじん達の共通点
(火)

蝉が元気に鳴いている。そろそろ梅雨明け宣言か。スマホに速報が入っていた。日野原先生が逝かれた、105歳。人生100年時代の象徴。夏は人を送る季節でもある感。

日野原先生の本は読んだことがないけど、自分を生きて、感じて考えて、人に伝えられるものを究められた大人(たいじん)。人に見えるのは穏やかな面。それほど自身の精神を鍛えられたということ。

かといって、過度な無理はせず、でも努力は絶やささない。『真の成功者とは、他の誰も犠牲にせず、自分の力で伸びていく人。力まかせでない人生』という。その模範のよう。

先日から『私の日本語雑記』(中井久夫 岩波書店)をぼちぼち読み始めている。買ってそのままおいていた本を今年は読もうと思った。著者は精神科医。

過日読んだ「岡潔」も「中井久夫」も本の中に俳句のことを書いている。そして「日野原重明」も俳句がお好きだったとか。これはどういうことだろう。

共通しているのは、みなさん、自分の道を究めている人。自分を生きて、世の誰かのためになる仕事をして、それがまた自分を生きさせる。それが実現できている驚嘆が俳句に向かわせるのかもしれない。

往々にして同じ分野でいち抜けている人は、異なる分野の造詣が深い。文系は理系の、理系は文系の素養がある。思考がグローバルになり、ヒラメキの頻度も増えるのだと思う。

ネットでグローバルな情報に接しても、自分でそれらを咀嚼する過程がなければ、造詣を深めることはできない。やはり、自分で勉強することが大事、と思う今日この頃。

2017/7/25
(火)

人を呼ぶ京都

今日は土用の丑の日。鰻で元気をつけたいほどカラダに堪える暑さ。今日は曇りだけど、昨日の午後一番に外出したら眩暈しそうな陽ざし。街いく人たちの表情も、勘弁してよ、という感じ。暑気払いをして、なんとか乗り切りたいもの。

京都は人を呼ぶんだなあ…と今週末にある講演会の案内を確認して思った。京都大学こころの未来研究センター主催「ブラックボックス化する現代社会～科学技術は私たちをどこへ連れて行くのか？」

別件の情報検索をしていた時に偶然みつけた。えっ、この二人が…?!と画面を一目して慌てて内容を確認した。この二人とは、講師の「下條信輔」+討論者「広井良典」。

『<意識>とは何だろうか』（下條信輔 講談社現代新書）は1999年2月に出ている。内容は記憶していないけど、おもしろく読んだことは覚えている。

この本も他も、ある専門分野ではあるけど、その中に埋没しせず、思考や視点がグローバルで、普遍的なものに気づかせてくれるものをくおもしろい>と感じ、読んできた。

『死生観を問なおす』（広井良典 ちくま新書）もそう。この本の出版は2001年11月。厚生省に10年いて1996年に大学の先生に転身したという。水を得た魚か、以来名前をよく目にした。

その「広井良典」が京都大学こころの未来研究センター教授になったと知ったのは新聞記事だった。京都は人を呼ぶなあこの時も思ったが、「下條信輔」は同センターの特任教授になっていたとは…。

同じ時期に別々に読んだ本の著者が十数年後に同じ場所で語る場に直接居合わせることができるなんて、時間の経過というのはいろいろば場面をつくってくれるものです。